

スポーツへの関わりに関する研究動向

野邊 政雄 ・ 梶房 出*

本研究の目的は、人々のスポーツへの関与に影響を与える要因に関する研究の動向を明らかにすることである。先行研究は、(1)スポーツへの実施・非実施についての規定要因、(2)スポーツを継続して行う規定要因、(3)競技者におけるスポーツからの離脱についての研究、の3つに分類・整理した。この作業から、2点が明らかとなった。1点目は、スポーツ行動の規定要因を明らかにする研究では調査票を用いた量的調査が、個人とスポーツや他者との関わりに着目する研究では質的調査が行われていたことである。2点目は、スポーツへの関わりには様々な要因が影響を与えていることである。そのため、それらを複合的に考察していくことが必要である。

Keywords：スポーツ行動，スポーツ参加，スポーツからの離脱

1 本稿の目的

人生80年といわれて久しい。その中で「生涯スポーツ」という言葉が盛んに叫ばれるようになった。生涯スポーツとは、「すべての人びとが各自の健康・体力や運動能力の状況、興味・関心、目標、ライフスタイルなどに応じて、自主的、自発的に文化としてのスポーツ活動を生涯にわたって学習し、生活のなかに取り入れて継続していくこと」(金崎2000b：39)である。この「自主的、自発的」という言葉からうかがえるように、無理してでも行わなければならないというものではない。しかし、荒井(1993)は、休日の過ごし方として、スポーツを望んで行っている人を調査したところ、スポーツをしたいからしているという人が少ないという指摘をしている。

では、なぜ人々はスポーツをするのか。スポーツ参加に関する研究は、スポーツ社会学や体育学の分野で研究されてきた。スポーツ参加とは、「人々がスポーツに対してどのようなかわり合いをしているかということ」(景山ほか1984：2)である。参加には直接的な参加(スポーツへの参加)と間接的な参加(スポーツの観戦)とがある。そのうち直接的な参加について、スポーツ行動についての研究が

なされている。

本論文では、スポーツ行動において、その規定要因を探求した研究に焦点を当て、その研究動向をまとめる。これによって、人々がどのようにスポーツに関わっているのかを明らかにしていきたい。

2 方法

国立情報学研究所論文情報ナビゲータCiNiiのデータベース、公立図書館の文献データベース、日本社会学会の文献データベース、日本スポーツ社会学会の文献データベースを主に使って関連する文献を収集した。そして、収集した論文を分類し、まとめていった。本稿で取り上げるスポーツ行動に関する論文は、スポーツ社会学や体育学の分野で研究されているものが多い。本稿では、テーマや研究内容を参考に3つの観点から分類を行った。

<分類における視点>

- ①スポーツの実施・非実施に関する研究
- ②スポーツの継続的な関わりに関する研究
- ③スポーツからの離脱行動に関する研究

岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育系社会科教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山大学大学院教育学研究科 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

Research Trends in the Involvement in Sports

Masao NOBE, and Izuru KAJIFUSA*

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

*Graduate School of Education (Master's Course), Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

3 スポーツの実施・非実施に関する研究

スポーツ社会学における社会化論はスポーツ的社会化 (Sports Socialization) 論と称されており、スポーツへの社会化 (Socialization into Sport) とスポーツによる社会化 (Socialization via Sport) との二つの側面から研究が展開されている (吉田1992)。スポーツへの社会化とは、スポーツの技術や知識、規範、スポーツに対する態度、価値などを内面化することによって、その集団や社会に相応しいスポーツ的行動様式を身につけていくことである。そこでは、個人がスポーツにかかわりを持つようになる過程が問題とされる。なお、もう一方のスポーツによる社会化とは、スポーツを通じてその集団や社会の価値や役割、望ましい行動様式を学習していくことである。スポーツによる社会化においては、スポーツは社会化の手段とされる (金崎2000b)。これら二つの側面のうち、スポーツへの社会化の側面に関する研究でスポーツ行動を規定する要因が明らかにされている。

荒井・松田 (1977) は、スポーツ活動の実施、非実施に寄与する要因として、主体的要因 (個人の内部で変更が可能な変数)、客体的要因 (個人内では処理できず、集団としてまた社会としての対応が要求される変数) をとりあげている。そして、主体的要因、客体的要因を、1次変数 (スポーツ活動に直接影響を与えることが予想される変数)、2次変数 (1次変数との関連において間接的に影響を与えることが予想される変数) に分類して分析を行った。調査方法は、広島県民の20歳以上の男女を対象に調査票による量的調査が行われた。その調査によると、生活意識とスポーツ行動との間に関連があり、スポーツを好む者ほど仕事と余暇について考え方が両立志向であった。また、所得や自由時間などの時間的要因について、スポーツ活動を妨げる要因として考えられてきたが、その関連度が高くはなく、スポーツ実施の決定的要因ではなかった。

松田ほか (1979) は、スポーツ種目選択行動の要因に着目している。スポーツ選択行動の要因として、現在活動要因 (時間帯、場所、仲間、指導者)、客体的要因 (結婚、子供、所得、環境、余暇時間)、主体的要因 (余暇観、技能、好嫌態度、欲求、効用態度、体力の自信、運動不足観)、運動経験要因 (きっかけ、学校時代、クラブ経験)、マスコミ要因 (テレビ、新聞) をあげている。この研究では、現在活動要因が男女ともに継続してスポーツを行うことに、最も強く関連していることが明らかになった。そのなかでも、特に「時間帯」「場所」「仲間」の関連が強い。「時間帯」や「場所」については、スポ

ーツ活動を行う施設・場所の数や規模以外にも、参加のしやすさ、利用のしやすさといった要因も考えられる。「仲間」に関しては、スポーツをおこなう上での、重要な他者としての意味をもっているといえるだろう。

糸野ほか (1979) は、上記の研究よりも従属変数を限定し、大学生のスポーツ参加に及ぼすスポーツ経験と重要な他者の影響について、パス解析を用いて分析している。現在のスポーツ実施に影響を及ぼす要因として、過去のスポーツ経験、特に高校時代のスポーツクラブ参加が最も強かった。次に、重要な他者として、友人の励ましがあげられる。重要な他者は学校時代のクラブ参加にも影響を与えていることから、学校時代のクラブ参加が現在の直接スポーツ参与を規定している可能性があると推論している。

このほかにも、金崎 (2000b) によって、スポーツ行動との関連が明らかにされている要因として、「性・年齢・結婚」「学業と職業」「所得」「出生条件」「スポーツクラブへの所属」「スポーツ技能」「スポーツ指導者」「スポーツに対する態度」「スポーツに対する行動意図」「規範信念」「パーソナリティ」が挙げられている。

これらの研究の多くは、質問用紙を用いた量的調査を行っており、調査時点でのスポーツの実施・非実施の調査しかおこなえていない。また、「基本的な問題点として、従属変数としてのスポーツ活動の側面が軽視され、スポーツ活動の質と量、例えば、内容・頻度・程度あるいは技術水準が無視される傾向にある」(多々納1980:104) ことが指摘されている。松田 (1979) のように、個人・対人・集団という種目類型に基づきスポーツ行動に関与する要因を明らかにしている研究もあるが、同じ球技であっても、ママさんバレーとラグビーとでは、実施者の属性や志向が違うため、その規定要因が異なり、同一のカテゴリーに入れることは不可能である (多々納1980)。

4 スポーツへの継続的な関わりに関する研究

金崎 (1992) によると、人がなぜスポーツをするのかは、スポーツ目的論やスポーツ手段論の立場から説明がされてきているという。また、スポーツへの社会化研究においても調査時点でのスポーツ行動の規定要因を明らかにすることで研究がなされてきた。

しかし、「比較的長期にわたるスポーツ行動の継続の実施の説明となると、スポーツの目的論や手段論あるいはスポーツへの社会化研究での方法論を超えたもっと別の視点からのアプローチが必要」(金

崎2000b:122)である。そこで注目されたのがコミットメントの概念である。コミットメントに関する研究はアメリカにおいて1960年代に始まった。この概念は、スポーツ社会学の分野でも取り上げられ、スポーツ行動の実施やその継続化を説明するのに有効であることが明らかになっている。

金崎(1992)は、スポーツ・コミットメントを「スポーツへの到達、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入すること」(金崎1992:37)と定義し、コミットメントのレベルと対象者のスポーツの重要度、スポーツの実施程度、実施時間、スポーツへの出費などとの関係を分析し、コミットメント尺度の作成を試みている。そして、コミットメントのレベルが高いほど、スポーツをより重要視し、スポーツの実施程度が高く、スポーツの実施時間が長く、スポーツへの出費が多いことを明らかにした。コミットメント尺度の作成を試みた研究として、高峰・守能(1997)もあげられる。この研究では、ランニング・コミットメント尺度をウォーキング・コミットメント尺度でも適用できるかを検討し、その信頼性と妥当性を確認した。

金崎(2000a)は社会人のスポーツ・コミットメントの形成を規定する要因として学校体育を取り上げ、コミットメントのレベルとの関係を分析している。過去のスポーツ経験が現在のスポーツ行動を規定する要因であることはこれまで言われてきた。学校時代の体育の授業や行事での経験や課外でのスポーツ活動など学校体育に関する諸要因が、学校卒業後の社会人のスポーツ・コミットメントと関連していることを改めて明らかにした。金崎・橋本(1995)においても、スポーツ・コミットメントの形成要因として、過去のスポーツ経験や重要な他者の存在をあげている。

また、金崎・橋本(1995)によると、人の行動は行動意図によって予測できる。そこで、スポーツ・コミットメントと今後1年間におけるスポーツの継続意図との関連を明らかにすることで、青少年のスポーツ行動の継続化を予測した。コミットメントレベルが高いものほど、「必ず続ける」というスポーツの継続意図をもっており、程度の違いはあれ、今後1年間は高い確率でスポーツ活動が継続されることが予測される。そして、スポーツ・コミットメントが形成されていれば、スポーツ行動への継続意図を持つようになる。スポーツの継続意図がスポーツ行動の継続を促し、スポーツ・コミットメントの形成や規定要因にフィードバックされ、継続化へとつながるといふスポーツ行動の継続化モデルを示した。

これらの研究は、コミットメントという新たな概

念によって、スポーツ行動をとらえようとしている点で、意義があるといえよう。また、過去のスポーツ経験の重要さが改めて明らかにもなった。しかし、スポーツの継続化を予測はしているが、実際に継続されたのか、実証されていない点で課題が残るといえる。

5 スポーツからの離脱行動に関する研究

1980年代半ばから、スポーツ競技者のバーンアウトが問題視され、活発に議論されるようになった。バーンアウト・シンドロームとは、1974年に米国の精神分析医Freudenbergerによって報告された、職場不適用によって生じる一種の病理現象を意味する。バーンアウトは、病理現象として報告され、心理学的問題のみに還元される向きがあったが、「スポーツ選手の競技生活に纏わる錯綜とした社会(対他者)的相互作用の中で生起することが明らかであるため、社会学的視座から分析していくことも求められる」(吉田・松尾1992:640)。

スポーツ選手のバーンアウトが問題視される背景として、岸・中込(1989)は、スポーツ選手のバーンアウトが「単に成績の低下やスポーツからの離脱といった問題に終わるものではなく、対人関係や学生競技者の修学上の問題、精神衛生といった日常生活の様々な領域に波及する」(岸・中込1989:236)と指摘する。また、大隅・西村(2003)は、「スポーツ競技者のバーンアウトの問題は、深刻化すると自殺に追い込む危険性すらあるという意味において看過できない問題」(大隅・西村2003:80)と述べている。

中込・岸(1991)は、5名の個別事例をもとにバーンアウトの発生機序に関する研究を行っている。彼らによると、バーンアウト者の病前性格として、仕事熱心、完全主義、几帳面といった脅迫傾向、対人関係における他者傾向、主張的行動がとれないといった特徴をあげることができる。「このような性格特徴が背景となり、高い理想や期待を抱き、何らかの原因で目標が成就できない場合、強いストレスを経験することにより燃えつきて(バーンアウト)しまうことになる」。これらのことから、バーンアウトの生起プロセスを「仕事に生きがいを抱いて、高い目標をもって熱中する時期があり、次に、その期待・目標が満たされない時期(停滞)、そしてさらに固執・執着して消耗していく」という仮説を提示した。この仮説をもとに事例を検討したところ、バーンアウト選手の競技歴において、競技での成功経験→競技への熱中→競技成績の停滞→競技への固執→バーンアウトといった変容過程が明らかになった。

吉田(1989)も、バーンアウトの過程を研究した。彼は、大学生の選手とその指導者との関係に着目し、指導者が選手へ抱く期待と選手自身が抱く期待とのギャップによってバーンアウトがおこることを明らかにしている。そのため、指導者と選手とのコミュニケーションの重要性を示唆している。

この研究をもとに、吉田(1992)は理論的枠組の提示を試みている。彼によると、バーンアウトは、スポーツ集団や指導者等からのスポーツ役割期待とスポーツ集団の成員等のスポーツ役割概念とによって問題的状况が生じ、役割交渉過程で合意が不成立となりおこる。問題的状况に陥らないためには、役割交渉過程において、合意をはかることが重要となってくる。

吉田(1994)は、この理論的枠組を用いてバーンアウトに陥った競技者のその後について調査している。競技者のその後についてを研究するため、以前の研究(吉田1989)における対象者を再び調査した。対象者は、軽度のバーンアウト競技者であったため、情緒的な支えを得ることにより、問題的状况を解決し、バーンアウトを克服するに至っている。彼によると、これらの過程はスポーツによる(を通した)再社会化と捉えることができる。今までのスポーツ社会化論は少年期を重要視することが多かった。しかし、バーンアウトという少年期に経験し得ない状況に大学期で直面し、再社会化を遂げている。このことは、青年期を研究対象とすることの有用性を示唆している。

これらの研究は、個別的な事例を扱うことで、バーンアウトに陥る要因やその過程を明らかにしている。バーンアウトに陥る要因として、個人の性格という問題もあるが、吉田(1989)のように人々の相互作用によってもおこる。そのため、バーンアウトの予防策を講じることが重要ではあるが、バーンアウトに陥ったとしても、その問題状況を解決し、スポーツと関わる環境作りが必要となってこよう。

6 考察

人々のスポーツへの関わりに関する研究動向について参加—継続—離脱の側面でもとめてきた。それらを受け、ここでは、2つの点を指摘しておきたい。

1点目は、研究方法について述べたい。スポーツの実施・非実施に関する研究や継続に関する研究のように、スポーツ行動の規定要因を明らかにする場合、調査票を用いた量的調査が行われている。また、離脱に関する研究のように、個人がスポーツや他者とどのように関わっているのかに着目する場合やその研究が初期的段階の場合、インタビューをはじめ

とする質的調査が行われている。

しかし、実施・非実施の場合、調査時点でのスポーツの規定要因を明らかにするというにとどまっている。その点を補完するためにも、継続に関する研究では、コミットメントの概念が取り上げられているが、実際に継続されたのかについての調査はなかった。スポーツ行動の規定要因を明らかにする場合、スポーツによっても、その要因が異なってくる。個人がスポーツに対してどのように関わっているのかを明らかにするには、各スポーツの特性も考慮した上で、参与観察をはじめとする質的調査が必要となるであろう。

ただし、質的研究の場合、個別の事象であるために、一般性の確保が難しくなるという問題がある。佐藤(2002)は、「現場調査を通してさまざまな技法を併用し、一方ではそれぞれの技法の長所を生かし他方ではそれぞれの技法に特有の短所を補い合っ」ていくことが必要であると指摘している。今後は、量的調査と質的調査とがお互いに関連しながら発展していくことが求められるだろう。

2点目は、参加—継続—離脱というその時期ごとに焦点を当てて研究が行われていたことである。筆者自身がこの観点でまとめたために言えることかもしれないが、時期ごとにスポーツとの関わりを捉えるのではなく、全体として捉える必要もあるのではないだろうか。また、スポーツへの関わりには様々な要因が影響を及ぼしており、それらを複合的に捉えることも必要であろう。

特に、継続に関しては、どこからを継続と捉えるかが問題になってくる。吉田(1994)の場合、軽度とはいえバーンアウトに陥りながらも、問題状況を解決し、バーンアウトを克服するに至っている。この過程を、スポーツにおける再社会化と捉えている。比較的長期にわたり、スポーツを行っている者の場合、スポーツにおける再社会化も含んだ上で、継続として捉えることもできる。このように捉える場合、ライフヒストリーの手法による研究が有効であると考えられる。

引用文献

- 1) 荒井貞光, 1993, 「レジャー化社会の中のスポーツとスポーツ文化行政の時代(生活の中の健康・スポーツ<特集>)」『社会教育』48(11):14-18
- 2) 荒井貞光・松田泰定, 1977, 「スポーツ行動に関する実証的研究(2)」『体育学研究』22(3):137-152
- 3) 大隅節子・西村秀樹, 2003, 「スポーツ競技者のバーンアウトに関する社会学的一視座——一流

- 競技者と所属集団との関係性をめぐって——』『健康科学』25：79-85
- 4) 景山健・今村浩明・佐伯聰夫, 1984, 「スポーツ参加の社会学について」『体育社会学研究』6：1-21
- 5) 金崎良三, 1992, 「スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参加に関する研究(1)——スポーツにおける友人関係によるコミットメントの尺度作成の試み——」『健康科学』14：35-42
- 6) ———, 2000a, 「社会人のスポーツ・コミットメントの形成に及ぼす学校体育の影響」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』4(2)：151-166
- 7) ———, 2000b, 『生涯スポーツの理論』不昧堂出版：104-105
- 8) 金崎良三・橋本公雄, 1995, 「青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究：中学生・高校生を対象に」『体育学研究』39(5)：363-376
- 9) 岸順治・中込四朗, 1989, 「運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み」『体育学研究』34：235-243
- 10) 糸野豊・池田勝・山口泰雄, 1979, 「パス解析によるスポーツ参加の分析」『筑波大学体育科学系紀要』2：23-30
- 11) 佐藤郁哉, 2002, 『フィールドワークの技法 問いを育てる, 仮説をきたえる』新曜社：298
- 12) 高峰修・守能信次, 1997, 「ウォーキング・コミットメント尺度の作成と検討ーランニング・コミットメント尺度を適用してー」『中京大学体育学論叢』38(2)：31-36
- 13) 多々納秀雄, 1980, 「スポーツ参加の多変量分析——数量化理論第Ⅱ類による要因分析——」『健康科学』2：103-118
- 14) 中込四朗・岸順治, 1991, 「運動選手のバーンアウトに関する事例研究」『体育学研究』35：313-323
- 15) 松田泰定・東川安雄・荒井貞光, 1979, 「スポーツ行動に関する実証的研究(3)——スポーツ種目選択行動について——」『体育学研究』24(1)：1-11
- 16) 吉田毅, 1989, 「大学競技者におけるバーンアウトの発生機序に関する事例研究——特に指導者との相互作用に着目して——」『体育・スポーツ社会学研究』8, 道和書院：183-207
- 17) ———, 1992, 「スポーツ社会学における社会化論への一視角：主体性をめぐって」『体育学研究』37：255-267
- 18) ———, 1994, 「スポーツ的社会的論からみたバーンアウト競技者の変容過程」『スポーツ社会学研究』2：67-79
- 19) 吉田毅・松尾哲也, 1992, 「スポーツ選手のバーンアウトに関する社会学的研究——社会学的概念規定への試み——」『体育の科学』42：640-643

(本稿は、梶房が野邊の指導のもとで執筆した原稿に野邊が若干の書き直しをおこなったものである。)

